

中高一貫教育の現状と課題

A Research Study of Unified Secondary School

油 布 佐和子

(学校教育講座)

Sawako Yufu

六 島 優 子

(片縄小学校)

Yuko Rokushima

学校教育講座

(平成17年9月30日受理)

I. 問題の所在

1. はじめに

現在進行しているわが国の教育改革は、「ゆとり教育政策」と「学力重視政策」との矛盾と混乱の中にある。

平成7年、文部大臣から『21世紀を展望したわが国の教育の在り方について』の諮問を受けた中教審は、「①. 今後における教育の在り方および学校・家庭・地域社会の役割と連携の在り方, ②. 一人一人の能力適性に応じた教育と学校間の接続の改善, ③. 国際化, 情報化, 科学技術の発展等社会の変化に対応する教育の在り方」の3つを主な検討事項とし, 集中的に議論を重ね, 翌年8月には①と③の課題について, 「ゆとり」と「生きる力」をキーワードとする第1次答申を取りまとめた。続いて平成9年には, ②の課題を中心に「大学・高校の入学者選抜の改善」「中高一貫教育」「教育上の例外措置」「高齢社会に対応する教育の在り方」などを審議し, 第2次答申をまとめている。

こうした一連の答申は, 従来のわが国の教育を根底的に捉えなおす内容になっており, 「ゆとり教育」政策として位置づけられる。すなわち, 画一的で中央集権的なそれまでの知識注入型教育が受験競争を促し, これらが教育病理現象を噴出させたというように, 戦後教育を『失敗』であると位置づけ, そうした認識の下に, その対応策として学習指導要領の改正や学校完全週五日制, 「総合的学習の時間」などの「ゆとり教育」政策を導入したのである。

しかしながら, 理系学生の学力不足問題を契機とした「学力低下問題」という世論の後ろ盾を得たことから, 文科省も, 中教審が答申を出したその直後に, 「ゆとり」「個性」「生きる力」等をスローガンとした教育改革の内容を, 大きく軌道修正せざるを得ない状況となった。平成14年の遠山文部科学大臣による「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」は, そうした状況を端的に表している。

このような状況の中で, わが国の教育現場では今や, それ自体がはらむ矛盾・歪みが十分に検討されるまもなく導入された「ゆとり教育」政策の枠の中で, 「学力重視政策」が強調されるという, 整合性や展望のない状況に陥っている。

本稿で取り上げるのは, 中教審第2次答申で示された, ゆとり・生きる力・個性などをキーワードとする「ゆとり」教育政策の大きな一端を担って登場した「中高一貫教育」である。本論文では, 賛否両論が展開される中で制度化された中高一貫教育の現状と課題を明らかにしたい。

2. 中高一貫教育とその現段階

「ゆとり」のなかで子どもたちが「生きる力」をはぐくむことが必要であると述べられた中教審第一次答申をうけ、第二次答申では、いかにして、一人一人の能力・適性に応じた教育を重視していくことが可能かという課題が論じられた。

自己責任の原則や公共性の問題などに部分的に言及しながら、第二次答申で示されたのは、「個人の多様な選択を認める豊かな成熟社会にあっては、教育においても、子どもたち自身、あるいはその保護者が、主体的に選択する範囲を拡大していくが必要になる」という「子どもたちの選択機会を拡大する」という事柄であった。

その結果、「今日、教育システム全体の中になお存している画一性の是正に一層に取り組んでいくことが急務となっており、各学校段階の取り組みを進めるだけでなく、学校間の接続の在り方について見直していくこと」が必要であると認識され、大学・高等学校の入学者選抜の改善、中高一貫教育、教育上の例外措置についての論議が焦点となったのである。

<中高一貫教育の設立意図>

こうして中教審第2次答申によれば、6年間の一貫した教育を選択的に導入することの意義は、第一に入学者選抜を課することのないため、受験圧力から解放され、ゆとりのある学校生活を保障すること、第二に、中等教育全体の多様化・複線化あるいは多線化により安定的な学生生活を子どもたちに提供し、自己の希望や目標を具体化し、自らの能力・適性・興味・関心に対応した進路を主体的に選択することを可能にするというものであった。

多様な教育を提供し、子どもや保護者による選択の幅を広げるという点からは、表1に示すような内容が、中高一貫教育における特色のある教育活動として例示されている。

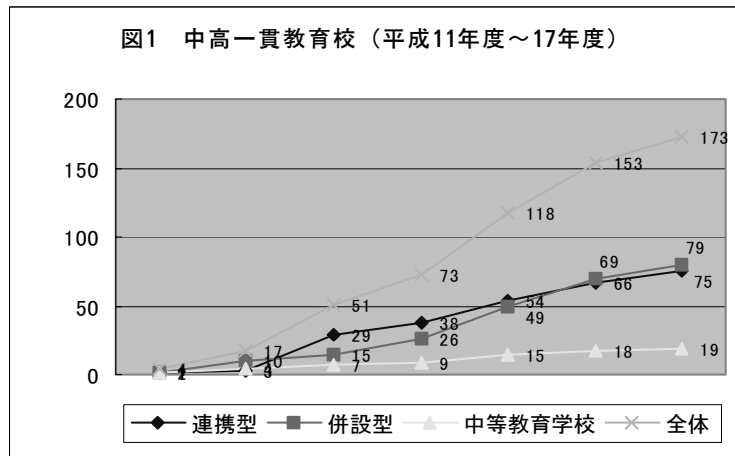
<中高一貫教育の実施形態>

ところで、マスメディア等で中高一貫教育が語られるときには、私立の6年制中高一貫教育と同様の形態が想定されていることが多い。しかしながら、中教審答申では中高一貫教育校については、複数の実施形態が提示されている。

第一の実施形態は、同一の設置者が、ひとつの学校として一体的に6年間の中高一貫教育を行うもので、いわゆる「中等教育学校」がこれにあたる。第二の実施形態は、同様に、同一の設置者が、高校入学者選抜を行わずに、県が県立高校と県立中学校を併設するというように、それぞれ独立の中学校と高等学校を併設する形態があげられる（「併設型中学校・高等学校」）。最後に、既存の市町村立の中学校と都道府県立高等学校が、高等学校入学者選抜を行わずに、教育課程の編成や、教員・生徒間交流等の連携を行い、6年間の継続的・計画的な教育を行うという形態で、「連携型の中学校・高等学校」がこれに該当する。ちなみに、平成17年度では中高一貫教育を行う学校は全国で173校にのぼり、中等教育学校19校、併設型79校、連携型75校という現況となっている。また、次頁図1に見るように、平成11年度に制度化されて以来、併設型の中高一貫教育校の増加が目立っている。

表1 特色のある教育活動

- | |
|--------------------------|
| 1 体験学習を重視する学校 |
| 2 地域に関する学習を重視する学校 |
| 3 国際化に対応する教育を重視する学校 |
| 4 情報化に対応する教育を重視する学校 |
| 5 環境に関する学習を重視する学校 |
| 6 伝統文化等の継承のための教育を重視する学校 |
| 7 じっくり学びたい子どもたちの希望に応える学校 |



＜中高一貫教育校の導入に当たっての諸見解＞

中高一貫教育校の導入に当たっては、中教審の場で賛否両意見がたたかわされた。

中高一貫教育の導入をメリットだと考える立場からは、受験の重圧から解放されたゆとりのある学校生活の中で、子ども自身の興味関心に基づき個性を伸張させ、自らの生き方を考えさせ、ふさわしい将来を選択していくことや、異年齢の人間関係を育てるという利点があることが強調されている。

これに対して、中高一貫教育校導入のデメリットを考える立場からは、高校受験の圧力からは解放されるかもしれないが、大学受験に有利になるような学校をめぐる、受験の低年齢化がもたらされることになるのではないかとする疑問や、中学校と高校の設置者の違いによる調整、義務教育の国庫負担をめぐる行財政的な問題が浮上するのではないかとする危惧が述べられている。

Ⅱ. 調査の目的と方法

1. 調査の目的

中教審答申は、能力・適性に応じた教育を展開すべきであるという観点から、学ぶ機会の多様性を主張したが、これに従って、「横の多様化」＝学校選択制と「縦系列の多様化」＝中等教育の複線化・中高一貫教育校の導入が進みつつある。

いち早く制度化された「横の多様化」＝学校選択制については、実施後何年もたたないうちに、人々の教育機会を義務教育段階から制度的に差別化しようとしているのではないかとする疑問が指摘され、その問題点が明るみに出つつある。

一方、中高一貫教育校がマスメディアで取り上げられたり、議論の対象になるとき、そこでは多くの場合、中等教育学校が語られるのみであり、増加著しい「併設型」中高一貫教育校や「連携型」のそれについては、十分な情報もない。1999年度に制度化され増加傾向にある中高一貫教育は、はたして思惑どおりに展開されているのだろうか。

本稿では、「ゆとり」教育政策で生まれたひとつの制度が、「学力重視」政策が強調される現状の中でどのような現状にあるのかを、中教審答申で掲げられた「多様な選択肢」「ゆとり」「異年齢交流」などの課題に焦点付けて、アンケート調査の知見に基づき、考察することを目的とする。

2. 調査の方法

調査は、表2に示すように、平成16年11月の調査時点で把握できた全国295校の公立中高一貫教育校全校を対象に、郵送法で『中高一貫教育校に関する調査』と題したアンケート調査により実施した。回収率は表2に示すとおりである。

公立の中等教育学校については全国7校中5校の協力を得ることができた。また、併設型の学校について

表2 調査対象・回収校

	全体	連携型		併設型		中等教育
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
2004年度(校)	295	154	64	35	35	7
回収票(校)	184	140		39		5
回収率(%)	62.4	64.2		55.7		71.4

は、調査票は中学校と高校の両方に郵送したが、中高合同で一つの回答を返送してくる学校などもあったため回収率が他に比べて低くなっている（注1）。

Ⅲ. 調査の結果

1. 中高一貫教育校は、多様な選択を可能にしているか？

1) 「特色のある学科」と教育内容

中高一貫教育の導入に当たって、どのような学科を設け、どのような教育内容にするかということは、設置者の判断に任されている。ここでは、中教審答申に例示されているような「特色のある学科」「教育内容」がどの程度実現されているのかを検討する。

特色のある学科

後期課程（高等学校）の教育課程については、「ゆとりある学校生活の中で、6年間の計画的・継続的な教育指導を展開し、生徒の個性や創造性を伸ばすという、中高一貫教育の趣旨を踏まえた特色の在るものにしていくな必要」があることが述べられており、そこには、

「複数の系列を設け、その中から生徒が能力・適性や興味・関心に応じて主体的に選択できる」『総合学科』

表3 後期課程の教育内容

	全体	連携型		併設型		中等教育
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	学校
普通科タイプ	85.4	81.7	81.0	94.7	100.0	100.0
総合科タイプ	6.6	8.3	9.5	0.0	0.0	0.0
専門学科タイプ	1.5	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0
その他	6.6	6.7	9.5	5.3	0.0	0.0
	N=137	N=60	N=42	N=19	N=11	N=5

タイプ、芸術、スポーツ、伝統文化、外国等の専門分野に興味・関心・才能を有する生徒に6年間の計画的・継続的な教育を行う」『専門学科』タイプと「複数のコースを設け、様々な選択を可能とする」あるいは「比較的小規模の中学校と高等学校が一体化し、幅広い年齢層を通じた生徒間交流により、学校の活性化を目指す」『普通科タイプ』が例示されている。

調査の結果は表3に示すとおりであるが、『普通科』タイプを選択する学校が圧倒的に多い。

教育内容の特色

また次頁表4は、中教審答申で例示された特色のある教育活動を示し、中高一貫教育校のそれぞれのタイプの学校が、どのような教育理念を掲げているかを質問した結果である。

表からも明らかのように、連携型では、「地域に関する学習を重視している学校」、「じっくり学びたい子どもたちの希望に応える学校」を教育目的としている学校が多数を占めている。併設型では、「国際化に対応する教育を重視する学校」が、また、中等教育学校では、

中高一貫教育の現状と課題

「体験学習を重視する学校」の割合が最も多いことが示されている。

しかしながら、調査回答校の中に、「伝統文化等の継承のための教育を重視する学校」と答えた学校が全くないことから明

らかなように、それぞれのタイプで力点が置かれている教育内容は異なるとはいうものの、中高一貫教育校全体でみると、教育内容の面から「多様な選択の可能性」が開かれているとはいえない。

2) 自校のセールスポイント

以上、調査からは、普通科タイプの中高一貫教育校がほとんどであり、教育内容にもバラつきが少ないという結果が示されたが、中高一貫教育校が「多様な選択肢」に貢献するどのような工夫をしているのか、他に検討する方法はないだろうか。

そこでここでは、「学校説明会に当たってセールスポイントにしている点があれば、自由に書いてください」という自由記述欄への記入を利用して、「特色のある学校」の内容をいま少し検討することにしたい。

自由記述の回答は論文末の資料1に示すとおりである。

連携型の中学校や高校では、「進路」や「少人数・習熟度」「地域」にかかわる記入が多く見られた。一方、併設型では、進路指導をセールスポイントとするという点では似ているものの、「進学」や「授業の充実」を意識した記述が目立っている。中等教育学校では、教育課程の工夫や特徴について記述しているものが多かった。

以上の自由記述から判断すると、中高一貫教育校の特色は、中高一貫教育校のタイプ別による「教育内容の多様性」によってアピールされているというよりは、少人数教育や生徒一人一人に合わせた「指導の仕方」に重点が置かれているといえる。

3) 中高一貫教育への期待

では、中高一貫教育の特色について、生徒の側はどのように認識しているのだろうか。

「あなたの学校の生徒についていかがいます。生徒にとって中高一貫教育校の選択理由は何かと思いますか」という質問の回答が表5である。

表からも明らかなように、併設型と中等教育学校では全員が「特色ある教育」と「校風がよい」という点をあげており、またこの二つのタイプでは、「新しい学校だから」という項目にも高い数値が示されている。

生徒の間に新しく設立された学校への期待感があること、また、そこでは「特色ある教育」という点が強調されていることがわかる。しかしながら、「特色ある教育」の内容は果たしてどのようなものが意識されているのであろうか。

アンケート結果から推測できることは、「生徒一人一人を見てくれる」という項目で高い数値が示され（併設型と中等教育学校では100%）ていることから明らかなように、ここでも「教育内容」ではなく「教育・指導の仕方」を示しており、中高一貫教育校への期待

表4 学校の特色（重視しているもの）

	全体	連携型		併設型		中等教育学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
体験学習	20.2	23.6	16.3	5.0	18.2	60.0
地域に関する学習	24.4	30.3	27.9	10.0	0.0	0.0
国際化に対応する教育	11.9	5.6	7.0	35.0	36.4	20.0
情報化に対応する教育	3.0	1.1	2.3	10.0	9.1	0.0
環境に関する学習	4.8	5.6	4.7	5.0	0.0	0.0
伝統文化等の継承のための教育	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
じっくり学びたい子どもに 応える	18.5	19.1	23.3	10.0	9.1	20.0
その他	17.3	14.6	18.6	25.0	27.3	0.0
	N=168	N=89	N=43	N=20	N=11	N=5

もそこにあるといえよう。

ところで、また重要なのは、併設型と中等教育学校では、「大学進学率がよい」「問題のある子が少なそう」「集中して勉強ができそう」という項目が非常に高い数値を示している点である。すなわち、「大学受験」「進学」という点に、生徒の期待が注がれているのである。このことは、中高一貫教育校の教師に「中学校で高等学校の学習内容を先取りして教えていますか」という質問の結果にも明らかである。この質問に「はい」と回答した

表 5 中高一貫教育校の選択理由

							(%)
		全体	連携型	併設型		中等教育	
			中学校	高等学校	中学校	高等学校	学校
ゆとり	A授業時間にゆとりがある	36.1	20.5	36.5	68.4	80.0	50.0
	B学習内容にゆとりがある	41.5	23.3	46.4	73.7	90.0	50.0
	C高校入試がない、楽	79.2	76.0	72.5	89.5	100.0	100.0
進路	D大学進学率がよい	33.1	14.1	31.7	78.9	70.0	75.0
	E専門学校への進学率がよい	21.4	16.9	39.0	0.0	10.0	50.0
	F就職率がよい	25.3	26.4	43.9	0.0	0.0	0.0
学校の様子	G特色ある教育	73.0	58.9	75.6	100.0	100.0	100.0
	H校風がよい	60.5	43.1	58.6	100.0	100.0	100.0
	I開かれた学校	62.8	64.9	80.5	26.4	50.0	50.0
	V安全、安心	75.1	73.4	73.2	78.9	90.0	75.0
	S入りたい部活がある	51.3	48.0	63.4	36.9	40.0	80.0
	L新しい学校だから	21.2	4.2	2.4	78.9	80.0	100.0
教育活動	Y生徒一人一人をみてくれる	75.8	56.8	90.2	100.0	100.0	100.0
	J集中して勉強ができそう	48.6	34.2	36.5	94.8	90.0	100.0
	a総合的な学習の時間が面白そう	30.6	22.2	34.1	47.3	30.0	60.0
学校の制度	N制服が魅力的	13.7	1.4	14.6	36.9	40.0	50.0
	O2学期制だから	2.1	2.8	0.0	5.6	0.0	0.0
	P単位制高校だから	6.3	6.9	5.1	5.6	11.1	0.0
	Q高校に専門のコースがある	39.3	45.2	50.0	15.8	10.0	0.0
	b給食、又は食堂がある	38.2	37.5	25.0	50.0	70.0	50.0
	R資格がとれる	41.1	49.7	70.7	0.0	0.0	50.0
特別活動		23.4	14.1	32.5	26.3	40.0	40.0
生徒の様子	W学校行事が楽しそう	51.0	36.6	58.6	68.4	80.0	75.0
	H問題のある生徒が少なそう	48.7	32.4	39.0	94.7	100.0	100.0
	K色んな人と友達になれそう	41.8	27.8	24.4	94.7	90.0	100.0
消極的意見	Z小学校の時にいじめにあった	14.6	2.8	15.0	36.8	3.0	75.0
	T行きたい学校がない	53.5	59.8	56.1	33.4	22.2	75.0
	Uこの学校が近い(こしかなない)	72.8	91.0	92.7	10.5	0.0	0.0
		N=151	N=77	N=41	N=19	N=10	N=5

者は、連携型中学校14.1%、連携型高校5.0%、併設型中学校47.4%、併設型高校40.0%、中等教育学校100%であり、この結果からも、併設型では、受験を意識した教育が行われていることが示された(注2)。

一方、連携型に関しては、「開かれた学校」「安全安心」「この学校が近い」という点が、高い数値を示しているように、併設型や中等教育学校とは異なる回答傾向が見出される。

4) 中高一貫教育校の多様性、選択肢の拡大は実現しているか？

中高一貫教育校は、複線的な中等教育を提供することをその目的として導入され、生徒も中高一貫教育校に「特色のある教育」を期待していた。しかしながら、中高一貫教育校には、『普通科』タイプの学校が圧倒的に多いこと、また、その特色とされるものは教育内容よりはむしろ、指導の仕方に焦点づけられているということからも、「複線的な中等教育」「多様な選択・選択肢の拡大」という課題の実現に貢献しているとはいいがたい。さらに、生徒の期待の「特色のある教育」ということの内容も、併設校・中等教育校においては、多様性というよりは、「大学の受験における一人一人に対応した指導」という点に限定されているように見える。

またとりわけ重要なことは、連携型と併設型や中等教育学校の間には、中高一貫教育校の存立意義をめぐる大きな溝もあることが示唆された。この点については、後述したい。

2. 中高一貫教育校は受験圧力から解放され、ゆとりをもたらしているか？

中高一貫教育校を推進する側は、受験圧力から解放されて「ゆとり」がもたらされるという点を強調していた。しかしながら反対する立場からは、受験の低年齢化をもたらすのではないかという危惧も指摘されていた。「受験圧力からの解放」や「学生生活のゆとり」「受験の低年齢化」の実際はどのような状況にあるのだろうか。

1) 入学者の選考について

中高一貫教育校全体で見ると、中学校（中等部・前期課程）の入学者選考を実施しているのは回答のあった135校中39校で28.9%と3割に満たないが、一貫校のタイプごとに見るとこの数値の意味は大きく異なる。連携型では入学者選考を実施している学校が5%にも満たないが、併設型と中等教育型では、中学校入学者の選考を全てが実施している（表6）。

表6 中学校入学者選考を実施している学校 (%)

全体	連携型		併設型		中等教育学校
	中学校	高等学校	中学校	高等学校	
28.9	3.9	4.2	100.0	100.0	100.0
N=135	N=76	N=24	N=20	N=10	N=5

表7 選考方法 (%)

	全体	連携型		併設型		中等教育学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
面接	97.1	66.7	0.0	100.0	100.0	100.0
作文	57.1	33.3	0.0	63.2	55.6	50.0
調査書	77.1	0.0	0.0	89.5	88.9	50.0
適性検査	48.6	0.0	0.0	53.6	55.6	50.0
実技	2.9	0.0	0.0	5.3	0.0	0.0
抽選	37.1	33.3	0.0	42.1	22.2	50.0
その他	22.9	100.0	0.0	10.5	22.2	25.0
	N=35	N=3	N=0	N=19	N=9	N=4

選考方法について多重回答で質問したところ、併設型と中等教育学校においては面接は必ず行われており、また調査書・適性検査・作文など様々な方法を組み合わせて行われている（表7）。

表8 選考で重視するもの (%)

	全体	連携型		併設型		中等教育学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
面接	97.1	66.7	0.0	100.0	100.0	100.0
作文	57.1	33.3	0.0	63.2	55.6	50.0
調査書	77.1	0.0	0.0	89.5	88.9	50.0
適性検査	48.6	0.0	0.0	53.6	55.6	50.0
実技	2.9	0.0	0.0	5.3	0.0	0.0
抽選	37.1	33.3	0.0	42.1	22.2	50.0
その他	22.9	100.0	0.0	10.5	22.2	25.0
	N=35	N=3	N=0	N=19	N=9	N=4

では、選考では何を重視するのだろうか。ここでは、併設型と中等教育学校についてその結果を見ると、併設型では、「思考・判断」と「表現・

理解」が大きな数値を示し、中等教育学校では「学ぶ意欲」「目的意識」「課題意識」が100%を記していた（表8）。

また、「生徒は選考試験のために準備をしてきたと思いますか」という質問については、「はい」と答えた割合は、併設型の中学校は100%、中等教育学校は75%という結果になった。

現在すでに「受験の低年齢化を招いている」という結論や、それが従来型の受験準備と同じであるという判断を下すのは難しいが、この調査結果からは、サンプルは少ないものの、併設型や中等教育学校では、高校受験に代わる中学受験と、受験準備の必要は認識されているということが示される。

2) ゆとりはもたらされたか? (1)

さて、学校生活においてはゆとりはもたらされたのだろうか。

まず、中学校と高校の6年間の接続の仕方がどのようになっているのかを調べた結果が、表9である。

連携型は圧倒的に「3年－3年」という接続方式であるが、併設型は、「3年－3年」と「2年－2年－2年」の割合がほぼ同じであり、中等教育学校は、「2年－2年－2年」を選んだ学校の割合が多い。

また、学事暦については、表10に示すとおりであり、連携型では3学期制度が中心となっているが、併設型

では中・高とも「3学期」「前期と後期」がほぼ半数、中等教育学校では「前期と後期」の2学期制が8割（5校中4校）を占めている。

以上のことから、学事暦の編成については、併設型や中等教育学校で、従来とは異なる工夫がなされていることがわかる。

しかしながら、一方で興味深い事実も明らかになった。

1日の授業数については、連携型の中学校・高等学校、併設型の中学校では「6時間」という回答が多いが、併設型の高等学校は「7時間」と答えた学校が多い（表11）という事実である。

さらに、課外授業を実施しているかどうかについて質問したところ、高等学校（高等部）では、希望者を対象としているとはいうものの、表12-1、表12-2に見るように約8割の学校が実施していることが明らかになった。併設型の中学校（中等部）においては、60%と高い数値を示している。

表9 6年間の接続の仕方

(年)	全体	連携型		併設型		中等教育学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
3年－3年	68.1	78.9	65.9	47.4	45.5	20.0
2年－2年－2年	11.4	3.3	2.4	42.1	36.4	60.0
その他	20.5	17.8	31.7	10.5	18.2	20.0
	N=166	N=90	N=41	N=19	N=11	N=5

表10 学事暦

	全体	連携型		併設型		中等教育学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
3学期	76.9	90.1	78.6	40.0	54.5	20.0
前期・後期	22.5	9.9	19.0	60.0	45.5	80.0
その他	0.6	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0
	N=169	N=91	N=42	N=20	N=11	N=5

表11 一日の授業時数

	全体	連携型		併設型		中等教育学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
6時間	85.2	92.0	90.7	80.0	36.4	40.0
7時間	5.9	0.0	2.3	5.0	54.5	40.0
その他	100.0	7.8	7.0	15.0	9.1	20.0
	N=169	N=90	N=43	N=20	N=11	N=5

表12-1 課外授業がある学校

全体	連携型		併設型		中等教育 学校
	中学校	高等学校	中学校	高等学校	
49.7	29.7	83.3	60.0	81.8	20.0
N=169	N=91	N=42	N=20	N=11	N=5

表12-2 課外授業の対象（多重回答）

	全体	連携型		併設型		中等教育学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
希望者	69.9	40.7	85.3	83.3	88.9	0.0
全員	27.7	59.3	8.8	8.3	22.2	100.0
学習の理解が遅れている生徒	32.5	44.4	29.4	33.3	11.1	0.0
発展的な学習ができる生徒	16.9	11.1	32.4	0.0	0.0	0.0
その他	6.0	11.1	2.9	0.0	11.1	0.0
	N=83	N=27	N=34	N=12	N=9	N=1

中高一貫教育の現状と課題

以上の結果からは、従来の学校のスケジュールを組み替え「ゆとり」を生み出す工夫はしているものの、併設型においては、生み出された「ゆとり」が授業の補習や強化という点で、再度スケジュールの中に組み入れられているという実態がみてとれる。

3) ゆとりはもたらされたか? (2) - 教師と生徒の認知 -

次に、受験の圧力からの解放という問題と、学校生活のゆとりという問題について、教師と生徒の意識を探って、これを検討することにしよう。

生徒が中高一貫教育校を選択するに当たっては、前掲した表5に見るように「高校入試がない(高校入試が楽)」という項目で「とてもよく当てはまる」「やや当てはまる」という選択したものが7割を超えている。このことから、

中高一貫教育校は「受験圧力から生徒を解放する」という点で、受験する生徒に魅力を与えていることがわかる。また、「授業時間にゆとりがある」「学習内容にゆとりがある」という項目でも、併設型と中等教育学校では、「当てはま

表13 中高一貫教育校の長所

		全体	連携型		併設型		中等教育学校
			中学校	高等学校	中学校	高等学校	
ゆとり	A高校入試の影響を受けない	76.1	72.4	63.3	100.0	100.0	100.0
	B「ゆとり」のある安定的な学校生活	64.4	51.1	65.8	94.7	100.0	100.0
	C生徒がゆとりく学べる	59.5	48.1	61.9	84.2	100.0	80.0
教育活動	D6年間を見通した教育活動	68.9	63.7	54.8	100.0	100.0	100.0
	E効果的な一貫した教育	68.3	61.4	57.1	100.0	100.0	100.0
生徒理解	F生徒理解がよりスムーズになる	86.6	77.2	95.2	100.0	100.0	100.0
	G生徒の個性を伸ばせる	69.3	58.0	63.1	100.0	80.0	100.0
	H生徒の個性を発見できる	73.2	63.6	78.5	94.7	80.0	100.0
生徒の交流	I異年齢集団のよさ	65.6	53.6	64.2	100.0	90.0	100.0
	R生徒の友人の幅が広がる	33.3	29.8	31.7	36.9	50.0	60.0
	J中高生が交流できる	90.3	84.1	95.2	100.0	100.0	100.0
	L生徒の視野が広がる	73.2	69.3	61.9	100.0	90.0	100.0
学習面	M進学準備のための期間が取れる	34.8	23.5	23.8	73.7	70.0	100.0
	N生徒の興味に応じた授業ができる	43.6	34.5	40.5	78.9	50.0	80.0
	P生徒に学ぶ意欲が感じられる	53.7	40.9	47.6	100.0	80.0	100.0
教員	O中高の教師間での交流ができる	92.6	89.7	92.9	100.0	100.0	100.0
	S教師の専門性を生かすことができる	56.4	49.4	45.2	94.7	70.0	100.0
	K教師の視野が広がる	87.8	79.6	97.6	100.0	100.0	80.0
学校	Q他校との交流がしやすい	30.7	34.1	42.8	5.6	10.0	0.0
	Tより開かれた学校になる	68.1	65.5	80.9	57.9	50.0	80.0
		N=164	N=88	N=42	N=19	N=10	N=5

表14 中高一貫教育の課題

	全体	連携型		併設型		中等教育 学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
A部活動が少ない	39.7	34.1	40.5	57.9	60.0	20.0
I学ぶ意欲がない	36.1	44.7	40.5	5.3	20.0	0.0
L生徒集団が固定 的になる	42.9	28.0	61.0	68.5	30.0	80.0
C時間的ゆとりが ない	17.4	28.6	7.3	26.3	10.0	60.0
D学習内容にゆと りが少ない	12.3	17.2	7.1	5.3	0.0	20.0
E高校(中3)で勉 強しない	64.3	64.7	73.8	46.7	62.5	25.0
F勉強についてこ られない	47.2	37.6	59.5	63.1	50.0	40.0
G塾に通う(通っ た)生徒が多い	13.5	5.8	4.8	42.1	50.0	40.0
B進路変更のフォ ロー	32.3	35.3	19.0	42.1	30.0	60.0
J出張が多い	50.0	55.3	80.5	0.0	0.0	0.0
K会議が少ない、 大変	52.7	56.3	69.1	26.3	30.0	0.0
H地域性に欠ける	19.3	9.3	9.7	63.1	40.0	60.0
N=163		N=87	N=42	N=19	N=10	N=5

る」と回答するものが6割を超えており、「ゆとり」を求めて生徒が中高一貫教育校に進学したことがわかる。

それでは、その実際はどうなのだろうか。

前頁表13は「中高一貫教育の長所は何だと思いますか」という質問に対する教師の回答である。

「高等学校入学選抜の影響を受けない」「ゆとりのある安定的な学校生活が送れる」「生徒がゆっくり学べる」「6年間を見通した教育活動が展開できる」「効果的な一貫した教育が可能になる」というすべての項目で過半数を超えている。

また、「中高一貫教育が抱えている課題は何だと思いますか」という質問に対して、中等教育学校を除いては、「生徒にとって時間的なゆとりがない」「学習内容にゆとりがない」という項目に「とてもよく当てはまる」「やや当てはまる」と回答するものは半数に及ばないことが明らかとなっている（前頁表14）。

以上のことから、「高校受験からの圧力の解放」と「ゆとりのある学校生活」という側面は、中高一貫教育校では、それが一定程度実現されていると判断される。

3. 連携・交流は進んでいるか

1) 異年齢交流の実態

教師に中高一貫教育の長所を質問した結果（前掲表13）では、「異年齢集団において、社会性や人間性を育成できる」「中高生が交流できる」「生徒の視野が広がる」という項目で、表に見るように、きわめて高い数値が示され、そうした異年齢交流への期待が高い。

ただしその実際は必ずしも十分であるとはいえない。

表15は「中等学校（中等部、前期課程）と高等学校（高等部、後期課程）で、一緒に学校行事を行っていますか」という質問に対する回答を示したものである。質問紙では学校行事での交流に限定しているが、連携型でそうした交流が少なく、また中等教育学校でも5校中2校からは交流の実態が報告されなかった。

2) 教師の交流

一方、教員職員の連携協力は促進されているかことが明らかになった。

表16に見るように、中高一貫教育校では「中学校の先生が高校で、高校の先生が中学校

表15 学校行事の交流

	全体	連携型		併設型		中等教育 学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
儀式的行事	18.9	0.0	2.6	85.0	90.9	66.7
学芸的行事	53.0	35.6	60.5	90.0	90.9	66.7
健康安全・体育的行事	41.0	21.6	38.5	95.0	100.0	66.7
旅行・集団宿泊的行事	6.3	3.5	7.9	5.0	9.1	66.7
勤労生産・奉仕的行事	48.5	45.5	51.2	55.0	45.5	66.7
	N=164	N=87	N=43	N=20	N=11	N=3

表16 教師の仕事

	全体	連携型		併設型		中等教育 学校
		中学校	高等学校	中学校	高等学校	
職員室が一緒	38.3	30.6	19.0	75.0	81.8	100.0
職員会議が一緒	45.1	34.1	34.9	80.0	90.9	100.0
カリキュラムを一緒に作成	45.9	39.8	36.6	70.0	63.6	100.0
教師ののり入れ	97.0	96.6	97.6	95.0	100.0	100.0
中学で学習内容の先取り	19.6	14.1	5.0	47.4	40.0	100.0
高校で中学の内容を教える	30.3	38.6	29.3	5.6	9.1	100.0
仕事が増えた	95.4	96.5	97.6	88.2	88.9	100.0
	N=162	N=87	N=43	N=20	N=11	N=4

中高一貫教育の現状と課題

で教えることがありますか」という質問に対して「はい」と回答した割合は全体で97%を超えており、教師同士の相互乗り入れが進んでいることがわかる。また、併設型や中等教育学校では、「職員室が一緒」「職員会議が一緒」の学校は75%を上回っており、また「カリキュラムは一緒に作りましたか」という質問にも6割を超える学校が「はい」と回答している。

以上のように、教師の仕事に関しては、相互の連携が図られている。しかしながら一方でこうした連携は、「中高一貫教育校になって仕事が増えた」という質問項目に「はい」と回答する割りあいが9割を超えていることからわかるように、多忙の原因ともなっている。

4. 中高一貫教育の課題

「中高一貫教育が抱えている課題は何だと思いますか」という質問の結果（前掲表14）、過半数を占めた項目は、「高校で勉強しない（中3で勉強しない）64.3%」「会議をする機会が少ない。大変52.7%」「出張が増えて自分の所属する学校をあけることが多い50.0%」という項目であった。

ただし、この数値は、主として数の多い連携校の回答に左右されるものであることから、中高一貫教育校の実施形態ごとにより詳細に検討する必要がある。

その結果、併設校では「部活動が少ない」「生徒集団が固定的になる」「高校で勉強しない（中3で勉強しない）」「勉強についてこれない生徒がいる」という項目が過半数を占めていることがわかった。また、中等教育学校では「生徒集団が固定的になる」「生徒にとって時間的ゆとりがない」「進路変更の生徒のフォローがしにくい」という項目が、主要な課題となっている。連携校では「高校で勉強しない（中3で勉強しない）」という項目と、教師の多忙が高い数値を占めている。

5. 中高一貫校の現状　－まとめにかえて－

1) 受験からの解放とゆとり

さて、調査結果から判断する限り、中教審で謳われた当初の目的を部分的には達し、中高一貫教育校は、確かに「高校受験」という重圧から子どもたちを解放したといえるであろう。

しかしながら、こうした評価には多くの留保をつけねばならないということも、また確かである。

なぜならば、第一に、高校受験の重圧からの解放ということは、「受験」一般からの解放を意味しないからである。

併設校や中等教育学校は選抜試験こそないものの、工夫された様々な方法で子どもたちを選考しており、中学受験の段階でその対処策を練ってくる子どもも少なくない。併設校では進学実績を上げることが目指されていたが、それが可視化すれば、準備を整えて併設校・中等部を志願する子どもが増加するだろう。そのような場合、「競争」が熾烈になるかどうか別として、受験の低年齢化は避けられない。

また、中高一貫教育校の卒業後の進路については、学校側に強く意識されており、特に併設校においてはその傾向が強い。このような学校では、子どもたちは従来と変わらない「大学受験」の重圧に直面するだろう。

すなわち、中高の接続による高校受験からの解放は達成されたにしても、中学段階での

選抜、大学受験を考えれば、受験というものの一般の重圧から全面的に子どもが解放されるわけではないのである。

第二に、受験という重圧が全面的に解消されることが望ましいのかどうかということも、検討されるべき課題である。

前述した、「中高一貫教育が抱えている課題」では「高校で勉強しない（中3で勉強しない）」が、連携型中学校・高校、併設型高校で6割を超えていた。「知りたい」「わかりたい」という学習への動機付けが外在的である学校教育においては、受験による縛り付けがなくなれば、動機付けを欠き、勉強をしない生徒も増加するのは自明である。学校生活の「ゆとり」がもたらした、弛緩した子どもたちの学校生活の指導と、学力の保障は教師にとって極めて大きな課題となるに違いない。

第三に、中等教育前期までに拡大した多様な選択肢は、子どもたちに早期の人生設計を要求することになる。子どもは小学校段階でそれ以降6年間、さらには選択した進路を通じてそれ以降の自分の生き方を選択せねばならないことになる。興味や関心の変化に伴う進路変更などの問題が顕在化して来たときの修正は、どのように可能なのだろうか。

複線型の学校体系と選択の機会の拡大という問題が、義務教育段階までに拡大されていくことの問題が、ここにはある。

高校受験の圧力からの解放に伴う、こうした問題の浮上を考えると、中高一貫教育校の制度化は必ずしも両手をあげて推奨されるようなものではないだろう。

2) 看過される連携型の中高一貫教育校

さらに重要なのは、こうした＜予期された＞問題とは異なる問題が、中高一貫教育校には存在しているという事実である。

というのは、上述してきたような議論の中では、現在のところ中高一貫教育校のおよそ半数を占める連携型の問題が十分には見えてこないという問題点である。ゆとり、多様な選択等々のキャッチコピーがあげられるが、連携型の抱える問題はそれとは位相を異にしている。

連携型は多くが非都市部に存在しており、これまでも、中学校からの進学先が連携先の高校以外にはほとんど選択肢がないような地域で実施されている。ここでは、生徒にとって多様な選択肢を用意するという中教審答申の設定そのものが意味を持たない。

これらの学校ではまた、これまでも高校入試の選抜試験は実質的にさほど大きな重圧となっていたとは考えられないことから、「受験圧力からの解放」という主張も、リアリティのないものと思われる。

さらにまた、連携型の高校が中学にとって複数の選択肢のひとつであるような場合には、中学校と高校の密接な交流は難しくなる。(注3)

ところで、保護者の学校への期待を自由記述で質問したところ(資料2)、連携型では、「学力の保障」のほか、「地域の人材を育てること」というような、地域活性化を目指した人材育成が要望されており、中高一貫教育校としての位置づけは、「地域の学校」として新たな展開ができるかどうかという点に焦点が当てられていることがわかった。

以上のように、中高一貫教育校には有している課題がまったく異なる実施形態、すなわち、併設型のように進学ということを目的に、既存の私立中高一貫教育校と競うような学校と、そうした都市的学校環境とは一線を画す地域での連携型のように、地域人材育成を目指した中高一貫教育が存在しているのである。

ゆとりを確保し、多様な選択肢をもたらすという主張が中教審答申の内容であるが、そ

中高一貫教育の現状と課題

うした主張は新たな問題を引き起こす可能性を孕んでいるし、また、連携型の有す問題はまったく視野に入れられていない。

こうした実施形態の違いとその実態をみるとき、「多様な選択肢」の有無やその意味をめぐって、早期からの子どもたちの進路の差別化、地域間格差問題等が、今後大きく浮上してくるものと思われる。

注

1. 中高一貫教育の文部科学省調べでは平成16年度の資料では153校であるが、本調査では、例えば、連携型中高一貫教育校等は、中学校・高校それぞれ別途カウントしたため、数値が文部科学省の発表と異なっている。
2. 「高等学校で、中学校の学習内容をまとめて教えることがありますか」という項目に「はい」と答えた割合は、連携型中学校38.6%、高校29.3%、併設型中学校5.6%、高校9.1%、中等教育学校100%であった。この結果から見ると、連携型では、高校で中学校の教育内容を補償するというような指導が他に比べ多く、併設型では受験を意識して高校の教育内容を先取りするという傾向が強く、また、中等教育学校では、教育内容について、中学校と高校の相互乗り入れが行われているということがうかがわれる。
3. 連携型の高校教師から電話で調査に関する質問があった。そのとき、「中学校の生徒にとってはウチは選択肢の一つなので、(ウチが)連携をとりたいと言っても、中学側からすれば、特定の高校とのみ交流を深めるということは難しい、という話になる」という悩みをうかがった。

(本調査は、油布が六島と共同で行い、その結果を分析したものである。本論分の構成・分析内容については油布が責任を負っている。なお、六島の分析については平成16年度福岡教育大学卒業論文『中高一貫教育に関する研究』に示されている。)

資料１ 自校のセールスポイント

連携型・中学校	進路指導	商業科の都立(公立)高校と、公立中学との連携型中高一貫教育校は大変めずらしいのではないだろうか。進路指導(インターンシップ等)は大変きめ細かに行われる。 6年間という長いスパンの中で自分に適した進路決定をしていくことができる。 少人数指導による進路の実現。 教育課程の連携の柱を「キャリア教育」と「郷土についての学習」としている。そのために中学校では「人間と社会」という教科を設定し、高校の「産業社会と人間」や「キャリアガイダンス」につなげている。また、高校の系列の内容を中学校の総合的な学習や選択教科で関連付けている。 生徒一人ひとりにきめ細かい指導を行き届かせて、進学希望生徒はすべて希望の進学先へ進ませ、就職を希望する生徒は100%いずれかの企業に就職させている。 生徒数が少ないので個別指導に力を入れている(高校)。体験活動や異年齢集団での活動を通して人間性の遂養を目指している。
	個別指導・習熟度・少人数	中学1年から高校の先生と接することができ、指導を受けることができる。高校の先生が加わることで、本校職員だけではできない習熟度別授業が可能となった。 簡便な入試。ゆとりある学校生活。習熟度別あるいはITなど、個に応じたきめ細かい学習指導を展開している。 中高一貫教育。少人数などきめ細かい指導。 基礎的、基本的内容の確実な定着を図る取り組み。 地元の子は地元で育てるという思いがあります。 地域に関する体験的、課題的解決的学習。学年を越えた縦割り集団の学習。落ちついた中で学習に取り組める学校。 連携型の中学校ですので説明会は新入生の仮入学時に新入生、保護者、校区小学校教員に説明。 本校の特色。 合唱活動。花づくり(菊づくり)。 地域の生徒全員が1つの中学校に入学してくるので、他校と比較してのセールスポイントというものはありません。 知徳体。 「生徒の心の居場所のある学校」であること。国際理解教育、環境教育をすすめていること。 中高の両親が近距離にあるので、授業の乗り入れなどの教育交流、部活動や行事等における生徒交流など広範囲の取り組みを行っている。 受験(一般入試)はなくなりますが、そのかわりに口頭試問、面接、小論文などで真の実力を見ることが出来る。 進路型中高一貫教育の推進。 研究会開発校として「カナダ学」や「BS数学」「BS英語」の教科について説明している。 進路型中高一貫教育を全国に先駆けて実施した。 在校生や保護者に説明会の折、高校の良さなどについて話をする。
連携高校	進路・キャリア	多様な進路希望に応ずることの可能な2年次より類型選択性(コース制)を導入している。 ①教育の情報化、ワークショップを活かした教育など、授業改善 ②キャリア教育の充実(インターンシップ等の導入) ③コース制の導入 ④ボランティア活動など特別活動の活性化 ⑤人権劇などによる人権教育の推進。 自己実現を目指した徹底した進路学習の推進 進路実現。選択コース制。 小規模ではあるが、生徒の多様な進路希望に対応できるカリキュラムを組んでいます。また、小規模校であることを生かし、個々の状況に応じたきめ細かい指導を行っています。 「自分らしさ」をみつけ「もっと輝く」3年間を一人ひとり全員が主役一地域と連携し、潤いと活気に満ちた魅力ある教育・国際理解教育の充実と海外研修(アメリカカリフォルニア市)・進路指導の充実(国公立大への進学)、(就職は3年間100%内定)・ボランティア活動・部活動の推進(文化部・運動部ともに前項大会出場)。 進路の実現ほぼ100%(高校)・合同体育大会・英語暗唱大会・海浜清掃・生徒指導の充実 普通科であるが1年次に「産業社会と人間」の授業で進路学習を学び、2年次より文理・生活・情報の3コース制をとっている。
	習熟度・少人数	習熟度別の班編成で幅広い学力に対応。個別指導の徹底。進路にあわせたコース別クラス(2年から)就職と進学。 少人数指導のメリット。 少人数で個に熱心な教育。 乗り入れ授業、体験型学習、少人数制、地域についての学習。 習熟度、小人数、ティームティーチング授業により基礎基本の徹底を行っている。 その他・特色 バリ島研修旅行。 町教育委員会の支援を受け、地域研究を実施している。3年次は町が費用を負担し、海外研修に全員参加させている。(韓国) H13よりGLOBE推進事業に取り組んでいる。(文科省指定)。H14日本代表として、GLOBE世界大会に出場し、英語で発表。H15環境大臣表彰授賞。パイオニアハイスクールに認定され、高大連携等に取り組んでいる。(道教委指定) ・中高一貫教育・コース制・学力向上フロンティアハイスクール。 ・1年生全員によるカナダ短期留学・学校設定科目「カナダ学」や「BS英語」や「BS数学」による基礎基本の定着と英語コミュニケーション能力の育成・1年生からの3コース制(特別進学・国際教養・情報ビジネス)。 連携型中高一貫教育にふさわしい連携活動と簡便な入試を行っている。 普通科を入学時から3つのコースに分けている。 地域の特色を取り入れた4類型のカリキュラム。 国際理解教育、情報教育の充実。 総合学科の特色や(小・)中・高一貫教育について。 授業交流が中高合わせて週2時間実施(高校から4中学校へ9人の英・数の教員が週36時間、各中学からこうこうへ1人ずつ英・数・国・理の教員が1人ずつ)・確かな学力を育成するため英・数・国(中1～高1)でチャレンジテストを実施。 普通科のコース制です。①文理コース⇒応用クラス設置します②情報コース③スポーツ・福祉コース⇒スポーツ系はゴルフ実習・ダイビング実習・実習があります。福祉系は介護実習・保育実習などがあります。 総合学科の4つの系列(情報ビジネス、福祉生活、郷土・環境、国際理解)。

中高一貫教育の現状と課題

併設型中学	授業・学力	学力保障と進路保障。
		中高合同の行事。個を伸ばす丁寧な指導。授業の充実。
		学校設定強化の開設(科学ワールド、言語ワールド、Kプロジェクト・交流)。総合的な学習の時間(ローカリティ、グローバルシティ)の重視。英語科の少人数指導やCALL教室活用によるコミュニケーション能力の育成。
	進学	デュアル・ティーチャー・システム。中3と高1では、中高教員が学級の正副担任として、相互乗り入れを行い、円滑な接続を図る。「イングリッシュ・サーフィン」「英会話」「探索数学」等の独自教科。
		英数の習熟度別授業(週4時間)・NHK新基礎英語必修・国際交流来学。
		中高合同の学校行事・基礎学力の定着と個性の伸長。
		高校を単位制に改編することで、生徒の個性や才能を最大限に伸ばす教育ができる。・高校から160名の生徒を入学させることで、内進生・外進生の融合を図り、マンネリ化せず、意欲的な学習活動が行える。
		中学校では、Lタイム、Sタイム、Tタイム。高等学校では、個別面談及び、学力の伸長度、国公立大学への進学実績。
	その他	○達成目標、生徒、保護者の学校満足度90%以上、生徒授業満足度80%以上、一期生国公立大合格者数70%以上 ○論理的思考力、表現力の育成…中学校 選択教科「ことば」、高等学校 国語の学校設定科目「実践現代文」 ○確かな学力の定着…学力内容の習熟の程度に応じた少人数指導、中・高教員によるTT56分授業。
		普通科進学学校との一貫教育・高い志の育成。
		高等部教員24名が中等部の授業の当たっている(単元により週1というように)・中1、4～5月に「勉強合宿」・新教科「表現」により総合表現活動・週30コマで、2コマはチャレンジングスタディ(英・数)・選択教科は普通科進学希望者(英・数・国)芸術科進学予定者(音・美)。
		環境科学科への接続を前提に、理数教育に力を入れていること・授業の日数・時数を最大限に確保すること・中高で取り組む学校行事の豊富さ。
		(中)小集団学習、中高合同の部活動。施設。(高)開かれた学校(オープンキーワードにした学校運営)。自由な校風。中高合同の部活動(異年齢集団の中の社会性の育成)
		総合的な学習の時間「地球市民学」。その他特に必要な科目「総合コミュニケーション」自己再発見キャンプ(中学1年)。フレンジップセミナー(中学2年)。海外語学研修(中学3年)。
		感動と触れあいの中で、確かな学力と豊かな心をはぐくみ、未来を切り拓く人材を育てる。・積極的に物事に取り組み、主体的に行動できる生徒を育む。・互いの人格を尊重し、橋梁区を大切にする生徒を育成。・向学心に燃え感性を磨くことのできる生徒を育む。
併設高校	進学・学力	中学校では、Lタイム、Sタイム、Tタイム。高等学校では、個別面談及び、学力の伸長度、国公立大学への進学実績。
		○達成目標、生徒、保護者の学校満足度90%以上、生徒授業満足度80%以上、一期生国公立大合格者数70%以上 ○論理的思考力、表現力の育成…中学校 選択教科「ことば」、高等学校 国語の学校設定科目「実践現代文」 ○確かな学力の定着…学力内容の習熟の程度に応じた少人数指導、中・高教員によるTT55分授業。
		デュアル・ティーチャー・システム。中3と高2では、中高教員が学級の正副担任として、相互乗り入れを行い、円滑な接続を図る。「イングリッシュ・サーフィン」「英会話」「探索数学」等の独自教科。
	その他	来年度から単位制、2学期制を導入し、進学実績の向上のため、教育課程を改編。中高教員の連携(TT)や相互乗り入れ授業。キャリア教育の推進。
		21Cのエースを育てる。学力向上…少人数・習熟授業、チャレンジタイム、土曜セミナー、検定修得。マナー教育…茶道。夢作り…部活動、ライフプランニング。
中等教育学校	教育内容	開かれた学校(オープンキーワードとした学校運営)。自由な校風(進路幅の広さ)。中高合同の部活動(異年齢集団の中の社会性の育成)。
		中高合同の学校行事・基礎学力の定着と個性の伸長。
		高校を単位制に改編することで、生徒の個性や才能を最大限に伸ばす教育ができる。・高校から160名の生徒を入学させることで、内進生・外進生の融合を図り、マンネリ化せず、意欲的な学習活動が行える。
		異なる言語環境や文化的背景のもとに育った生徒が、能力や適性に応じて弾力的に学ぶ中高一貫校として、教育活動を展開。
	その他・不明	1学級は30人程度とする。数学、英語は、15人程度の少人数で行う。
		全寮制の中高一貫校であるため、他の学校では体験できないことがたくさんある。「総合的な学習の時間」や中等教育学校のカリキュラムなど、常に新しい提言を全国に向けて発信している。
その他・不明	教育内容	高校生との交流(行事や部活等)・きめ細かい学習指導・高校の学習内容の一部を中学校に取り組みで実施できる(シラバスの特徴)・高校教師による中学生の指導・活発な部活動。
		きめ細かい学習指導(個別課題と週はじめの考慮)⇒毎週。年間約7泊の宿泊研修1泊2日×7回or2泊3日×2回+1泊3回など。
		体験学習が多い(地域人材の活用)全員部活。
		徳育を教育方針にすえて教育を行うこと。早い時期からの進路意識の高揚。
	その他・不明	達成状況、学校の特色、方針が明確にわかるように数値目標をあげて本校の教育方針、教育内容の周知をはかっている。

資料 2 保護者や地域の要求

連携型 中学校	学力保障	<p>わかりやすい授業をして生徒に基礎基本の力をつけてほしいと願っている。</p> <p>地域に開かれた学校になること、基礎的、基本的な学力を身につけることを期待されている。</p> <p>より健全な学校。学力の向上。</p> <p>確かな学力をつける。豊かな心を育てる。自分の進路について決定していく能力を育てる。</p> <p>6年間を見通した学習ができることを喜んでいる反面、入試がなくなり、勉強しなくなると危惧する声もある。</p> <p>学力の保障。心の教育。</p> <p>学力の保障。信頼される学校づくり。開かれた学校づくり。</p> <p>学力の向上。部活動の充実。</p> <p>心身共に健康で確かな学力を身につけた生徒の育成。</p> <p>確かな学力の定着を向上。豊かな心の育成。特色ある学校。</p> <p>豊かな心を育む。学力を向上させる。体力を向上させる。</p> <p>基礎基本の定着(学力)。部活での体力作り。</p> <p>中高一貫教育をとることによる学力の低下を心配する声があり、それに対する対策が期待されている。</p> <p>基礎学力をしっかりと身につけられる教育の実施。個性を伸ばす教育。様々な体験活動や総合学習を通して、生きる力、豊かな心を育てる教育。</p> <p>中高一貫教育の目標の一つに「基礎学力の向上」があります。保護者が期待を寄せているのも学力の向上です。</p> <p>久米島は来年度入学者から中高一貫入試を行う。それに伴い、受験勉強をしなくなるのではと、学力低下が心配されている。期待より不安が多いのが実状である。</p> <p>希望進路実現・部活動の強化・地域に根ざした学校づくり。</p> <p>中高一貫教育をより改善させ、基礎学力の定着も望んでいる。</p> <p>確かな学力の定着・国際人としてコミュニケーション能力の向上</p> <p>学力の向上</p>
	地域に根 ざす人材 学習	<p>基礎基本の徹底(生きて、社会人として自立するための基礎を培うこと)・学力面・しつげ面ともに</p> <p>基礎学力の向上とその維持・心の教育の充実(思いやり、協力、きまりの遵守等)・学校の情報(生徒の様子、業績、町で唯一の中学校であることから、強化の学力の向上から、部活動での活躍などあらゆる面で)の期待があると思われる。また、小さい町なので、将来の町の担い手として、人材育成も期待されているかもしれない。</p> <p>地域に根ざした学校。真面目、誠実で幅の広い「生きる力」をもった、自分で考え、行動できる生徒の育成ができる学校であってほしい。</p> <p>地域に根ざした学校(地域学習等)。開かれた学校。個に応じた指導をしてくれる学校。</p> <p>地域に開かれた学校、地域とともに歩む学校。</p>
地域理解	地域理解	<p>地域に根ざした学校として、地域を巻き込んだ行事等。</p> <p>連携型中高一貫教育に取り組んでいるがほかの高校へ進学する生徒数が多いため保護者は生徒の希望にそう進路実現を期待されている。地域からは町に一つの中学校とした誇りを持った意欲的で個性を伸ばす教育の推進を期待している。</p> <p>地域一体となり、子供たちの豊かな心を育て、確かな学力をつける学校。</p> <p>基礎学力の確実な定着。進路指導、生活指導。部活動他。</p> <p>子どもの学力の充実。地域の活性化。</p> <p>1人1人に確かな学力を定着させること。ふるさとを愛し、誇りを持つこと。豊かな人間性、および社会性。</p>
	道徳性	<p>片品村の唯一の中学校であることから、本校には、学力向上はもちろんのこと、多様な期待が寄せられていると思う。学力向上以外に、部活動、生徒の生活活動、校風などあらゆる面において、他地域の中学校の規範となるような学校であってほしいと願っていると思う。へき地に立地するがゆえに閉鎖的な面もみられるが、“地域の学校”という道徳心の向上。学力の向上。地域理解。</p> <p>具志川中、久米島高校とともに、地域の教育力がここ10年低下してきた。さらに2020年に島でただ一つの高校が統廃合の可能性もでてきた。よって以下の2つ①生活態度の向上②基礎学力の向上→島全体の発展。</p> <p>日常の教科指導の充実による基礎基本の定着・特別活動の充実による望ましい人間関係の構築や将来に向けての目標設定&職業観の育成・中学生の視点で見た我が町の活性化、積極的な参加姿勢。</p> <p>基礎基本を確実に身につけさせる学習指導・個に応じた指導・部活を通して強い精神力の育成。</p> <p>基礎基本の定着・生徒の能力、適性の伸張・地域で子供を保幼小中高と育成すること。</p> <p>思いやりがあり明るく元気な子供であってほしい。自ら進んで物事に取り組んでほしいと願っている。</p> <p>中高一貫教育校としての期待というよりも中学校の期待としては「学力をつけること」「友と共に協力し合いやりとげること」「他人を思いやる心」「健やかな心身と強い意志」などがそれぞれ挙げられており、次年度の教育課程編成に生かし、具体的な手立てを考えていこうとしている。</p> <p>思考力、判断力、表現力も含めた学力の向上。部活動の活発化。教員の指導力の向上。</p> <p>思いやり等、道徳性の身についた生徒。学習に対して基礎・基本を身につけている生徒。</p> <p>わかりやすい授業。部活指導の充実。人間性の育成。など。</p> <p>連携型であるため通常の中学校に対するものと変わらないと思われる。</p> <p>高校がもっと特色を出して魅力ある学校にしてほしい。</p>

中高一貫教育の現状と課題

連携型 高校	進路進学	進路保障。健全な人格の育成。
		6年間の中高一貫教育終了後の進路の保障。
地域社会 への貢献		進路希望の達成。
		学力の向上と能力や個性の更なる伸長により、希望する進学先、就職先への合格(進路保障)。
		地域の子どもたちの中におけるリーダー性。就職、進学(専門～短大～大学)に応じた、きめ細かな進路指導など。
		地元(通学可)の高校として、今後も存続すること。生徒の進路希望に応じた指導内容等。
		中高一貫教育の出口保障(進路実績の向上)・基礎基本の定着と学力向上。
		存続・生徒の品格の向上・大学進学率のアップ。
		進学内容の向上。
		地域に根ざした学校。学力をしっかりとつけること。生徒の進路希望を実現させること。
		地域の学校として信頼できる学校になってほしい。
		地域の学校として地域の子どもたちを健全に育成し、将来社会に貢献できるよう教育するよう期待されていると思います。この期待に応えられるよう、本地域では学力の向上、個性の伸長、社会性の育成を3本柱として中高一貫教
		進学、就職等、進路希望の実現。地域社会への貢献。
		生徒一人一人の様々な進路やニーズに対応した教育課程を設定している学校。少人数指導等、ここの生徒に対応したきめ細かい指導をおこなう学校。地域の担い手として、将来活躍できるような人材を育てる学校。
		本校(高等学校)に対して・生徒一人ひとりに対する、きめ細かな指導を従来通り継続してほしい・充実した進路指導(中学生・中学校保護者・中学校教員に対する説明会・研修会も含めて)を今後も継続し、国公立大への進学者をさらに増やしてほしい。(就職希望者内定100の堅持)・地域との緊密な連携を維持し、さらに深めて言ってほしい・ボランティア活動、部活動の推進をさらに進めてほしい・一層の学力向上を図ってほしい。
		地域にとってプラスになる人材を育ててほしいということを期待していると思います。
		奈良県の南半分の地域に唯一存在する高校ということ、今年で創立140年目ということからも、高校が位置する地域力のみならず奈良県南部の山間地域における人材育成機関としての使命のもと、生徒減少化の中で保護者、地域、学校が協力して存続に努力している。
		地域、児童、生徒のリーダー・地域行事への積極的参加・確実な進路の実現・充実した生徒指導。
		過疎化が進む本町において、この先、本校が存続できるかどうかが重要課題となっている。
		地域の人材、後継者の育成。
		高い進路希望の達成。地域の担い手の育成。
併設型 中学校	進路進学	学校の特色(地域・環境学習等)の推進。進路指導の充実。一人ひとりの夢を実現できる学校。郷土理解を深め、地元に貢献できる人材の育成。
		特色ある学校づくり・進学実績と進学体制作り。
		県東部地区の進学拠点校として進路保障が期待されている。
		大学進学。地域のリーダーとなる人材育成。さまざまな体験活動。社会貢献への志。
		6年間を見通し、高校受験のないゆとりある教育。学力を伸長させる教育。豊かな人間性を育てる教育。
		大都市初の中高一貫校としての期待。高校改革の重点校としての高校専門学校エンタープライジングに接続する中学校としての期待の大きさを感じる。
		確かな学力を身につけ、深く考えることができる力を身につける。・将来の自分の進路実現へ近づける力をつける。これからの時代を生きていく上で、大切な知恵と人格を持った人間としての成長。
		ゆとりある6年間の学校生活の中で将来に向けた基礎基本的学力の定着と個性の伸張・一人ひとりの生徒が本校で6年間過ごしてよかったと思うこと。
		学力を伸ばす・対人関係能力を高める・感性を育む・国際社会のリーダーとなる人材の育成・芸術分野のスペシャリ
		高い学力、品位ある校風、生き生きした生徒の姿などとともに、日常の学校運営に適切な情報発信、開かれた学校づくりなどが期待されていると思う。
		本校は二中一女を母校とした伝統校であり、難関大学を含む進学実績を上げることが期待されている。また、勉学だけでなく、人間関係面の期待も大きい。いわゆる全人教育。
		高校入試がないことによる心のゆとりを学校行事に有効に生かしていくこと。6年間を見通した教育活動の展開による個性の伸長。中高生の交流による豊かな人間性の育成。
		発展的、探求的な学習による高度な教科学力の練成。社会性、規範意識の涵養と自己管理能力の育成。体力の育
		高い志をもって、社会の平和と発展に貢献できる人材の育成。国際性豊かな生徒の育成。
		(中)個性の伸長(学力を含めて)、夢実現、高い満足度、中高一貫のゆとりある教育、部活動の活躍(高)学力の伸長、進学実績、中高一貫のゆとりある教育、部活動の充実。
		一人一人の能力、適性に応じた6年後の希望進路の実現。明るく活気に満ちた学校生活。地域社会への貢献。
		県をリードする人材の育成。
		落ち着いた学校環境・学力の定着。
		6年後の進路実現を果たしてほしい・落ち着いた教育環境のもとで学習ができる。
ゆとり		

油 布 佐和子 ・ 六 島 優 子

高校	7年間を見通し、高校受験のないゆとりある教育。学力を伸長させる教育。豊かな人間性を育てる教育。
	発展的、探求的な学習による高度な教科学力の練成。社会性、規範意識の涵養と自己管理能力の育成。的確な進
	高い志をもって、社会の平和と発展に貢献できる人材の育成。国際性豊かな生徒の育成。
	学力の伸長。進学実績。部活動の活躍。中高一貫のゆとりある教育。
	地域の高校として、地域に貢献するとともに、生徒一人一人の夢実現ができるような高校。併設中学校から、平成18年度高校に入学してくるので、今まで以上の進路実績を。などの声を聞いている。
中等教育型	ゆとりある6年間の学校生活の中で将来に向けた基礎基本的学力の定着と個性の伸張・一人ひとりの生徒が本校で6年間過ごしてよかったと思うこと。
	本校は二中一女を母校とした伝統校であり、難関大学を含む進学実績を上げることが期待されている。また、勉学だけでなく、人間関係面の期待も大きい。いわゆる全人教育。
	新しい学校教育システム。学力向上。社会人になる素質。
	日本の学校へのスムーズな適応(外国人児童・帰国児童)。コミュニケーション能力の育成。生徒の個性を生かした教育の推進。豊かな国際感覚の育成。など。
	英語を使いこなし、国際社会で活躍できる人材の育成。
不明	寮生活を通しての体験、自然の中での体験を通して、豊かな人間性を育んでもらいたいと思っている。ただし、学年が上がるにつれて、進学についての期待が大きくなってくる。
	確かな学力を身に付け、大学などへの進学が確実にできるようにする。・個性を伸ばす・社会の一員として必要な幅広い能力を身に着ける・困難な課題に柔軟に対応できる思考力や判断力を身につける・自分で決まりを守り、他人を思いやることのできるような豊かな人間性を育てる・自分の考えを、わかりやすく表現する能力を身に着ける・自分で学んでいくための学び方や学ぶ姿勢を見につける。
	進路指導の充実。様々な体験や人間関係づくり。
	ゆとりある時間を活用した教育活動の展開。学習意欲の高揚と確かな学力の定着。異年令集団を通じての社会性
	各教科の基礎基本をしっかり身につけさせてくれる学校。
	学力向上。地域を大切にする教育。島に残るような生徒。
	期待されている。
	あまり理解していないがたくさんあると思います。